

あり、市井に存在する洋風建築は小富士海軍航空隊が建設した兵舎のみである。

二 寺社建築

(一) 寺院

蓮照寺本堂 (稲留)

浄土真宗本願寺派に属し、光耀山と号する。開基は天正六年(一五七八)で、筑後久留米藩領小金丸村に創立、安永期(二七二一八〇)に現在地に移転したと伝えられる。本堂は嘉永四年(一八五二)、十代玄訥の代に建築されたという。大字稲留字谷に位置し、山裾の高台上に南方を正面として境内を構える。参道正面に南面した本堂、東方に鐘楼、西方に妻入りの庫裏、その南方に土蔵を配する。

本堂は桁行六間、梁間六間を測り、屋根は平入りの一重、入母屋造棧瓦葺、向拝一間を付すが、当初は本瓦葺であった。雨葛に布石二段を巡らし、正面に石階二段を設ける。基壇は壇上積、側廻りは切石礎石上に切面取の方柱を建て、切目長押・内法長押で固め、線型木鼻付頭貫を通し、組物は舟肘木を載せる。入側廻りは円柱を建て、内法長押で固め、頭貫を通し、組物は平三斗を載せる。中備は外陣大虹梁上と内外陣境に本蟬股を置き、簡素な造りである。軒は一軒、半繁垂木を配り、妻飾りは新しい。

向拝は切石礎石上に石製礎盤を据え、几帳面取の方柱を建て、組物は連三斗の出三斗を載せる。水引虹梁に獺を象った木鼻

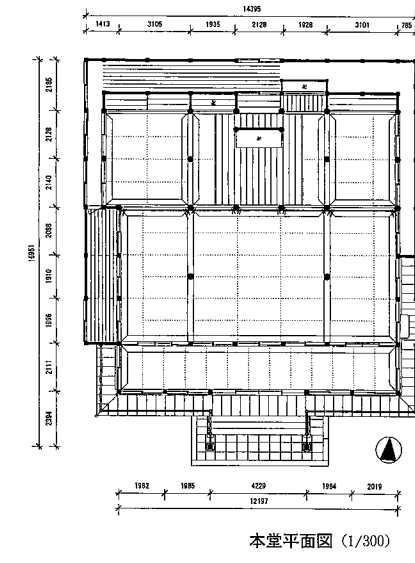
を付し、中備に本蟬股を置き、母屋とは海老虹梁で繋ぎ、獅子を象った木鼻を付し、菊の籠彫手挟を付す。軒は一軒、半繁垂木を配る。

内部は内陣と外陣を分けた浄土真宗本堂の平面形式を採り、床は内陣が拭板敷、外陣は余間が畳敷、天井は内陣が格天井、外陣が竿縁天井を吊る。須弥壇は禅宗様、入母屋造厨子を置く。柱間は正面が蔀戸を吊り、側面が引違い障子戸を建て、雨戸を引き通す。三方に擬宝珠高欄付切目縁を巡らし、正面に木階三級を設ける。柱は側廻りが松材、入側廻りと向拝が櫻材を用い、彩色は施さない。

内外陣境の蟬股は十八世紀中期の様式を示し、側廻り方柱の面取は大きく、柱間に蔀戸を吊り、広縁廻りに長押を巡らし、住宅風の意匠を呈する一方、外陣と向拝の虹梁上蟬股は一九世紀中期の様式を示す。安永期(二七二一八〇)の移転時に建築された住宅風本堂の外陣に、円柱を建てて大虹梁を架け、向拝を付して嘉永期(二八四八五三)に改造を施したものと考えられる。江戸時代中期に建築年代が遡る古式を留めた本堂として貴重である。

瑠璃光寺旧本堂 (稲留)

不知火山と号し、真言宗に属す。大字稲留字火山薬師に所在し、火山中腹に南方を正面として境内を構える。創立当初は火山の山頂近く奥の院に鎮座したが、天文期(一五三二一五四)に焼失し、宝暦期(一七五一六三)に千如寺実相によって再興され、安永期に僧瑠璃光が糸島郡内を巡って喜捨を請い、堂舎



本堂外観



本堂向拝



本堂外陣

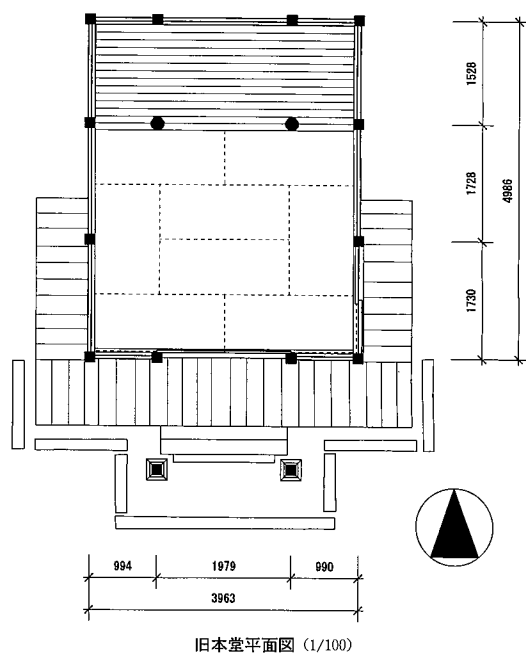
本堂平面図 (1/300)



旧本堂向拝



旧本堂外観



旧本堂平面図 (1/100)

図1 蓮照寺本堂(上)と瑠璃光寺旧本堂(下)



※第二章・第一節・二 寺社建築(抜粋)

文化財編 全153頁

文化財は、長い歴史の中で育まれ、今日まで守り育てられてきた貴重な財産です。志摩町は、古来より大陸との交流の拠点になった地域として、日本の歴史上特筆すべき位置を占めており、数多くの文化財が存在します。ここでは、寺社・神社・民家・洋風建築などの歴史的建造物、絵画・彫刻・工芸などの美術工芸品、史跡・考古資料・名勝・天然記念物などについて紹介します。

文化財の中には、その全容が明らかではないものも多くありますが、ここでは既に調査がなされ、文化財として客観的に評価されているものについて紹介しています。

文化財編 執筆者紹介

- 河合 修 (志摩町教育委員会社会教育課)
- 末吉 武史 (福岡市博物館学芸員)
- 中山喜一郎 (福岡市博物館学芸係長)
- 宮本 雅明 (九州大学大学院芸術工学研究院教授)

